朝日新聞 DIGITAL

（記者が歩く）大川小、残すか解体か　宮城・石巻、地元の話し合い始まる　東日本大震災４年目

2015年3月2日05時00分

被災したまま残る大川小学校の校舎＝いずれも宮城県石巻市

東日本大震災の津波で児童と教職員計８４人が犠牲になった宮城県石巻市の大川小学校。被災した校舎を震災遺構として保存するか、解体するか。話し合いが始まった。震災から４年。ここまで時間がかかった背景には、被災し、多くを失った人々の切なく苦しい思いがあった。

暗くなって降り出したみぞれは、夜更けには吹雪のようになった。

昨年１２月３１日。時計の針が０時に近づくと、佐藤和隆さん（４８）は北上川沿いの道路を車で東に向かう。目指す先は大川小学校の校舎。川沿いの低地にあの日のまま今も立っている。

「雄樹、明けましておめでとう」。校舎前の祭壇に手を合わせ、声をかける。

震災後は毎年ここで年を越す。神社への初詣は行かなくなった。見渡すとグラウンドが目に入る。学校で亡くなった三男の雄樹君は当時、大川小の６年生。スポーツ少年団で野球に夢中だった。

「校舎があるから、ここに来る。慰霊碑だけでは、やがてみな忘れてしまう」

震災の記憶と思い出を消さないために、校舎を残したいという声は少しずつ広がっている。

昨年、仙台市と東京都内でのシンポジウムで、大川小を卒業した中高生が校舎保存を訴えた。命を救えなかったことを伝えるとともに、楽しかった友達との思い出が詰まった校舎を消してほしくない、との願いからだ。

地震の後、児童たちは約５０分校庭にとどめられ、移動を始めた直後に津波に襲われて多くが犠牲になった。校舎のすぐ裏には山があり、そこに登るか、もっと早めに避難を始めていれ

ば助かった、と遺族たちは思う。

只野英昭さん（４３）は学校で妻と長女を亡くした。近くにあった自宅も流され、父を失った。教訓を刻むためにも保存を願う。

校舎と体育館をつないでいた渡り廊下は、なぜか海側に向かって倒れている。津波の動きを示すものとしても貴重だと思う。「周辺の地形とともに『遺構群』として残してほしい」

だが、すべての遺族が同じ思いではない。

「校舎の中のわずかなすき間に、子どもがいるかも知れない」。ある遺族は、そう語る。学校にいた子どもはまだ見つかっていない。一帯の捜索は行われたが、いまも４人の児童が行方不明のままだ。校舎をすべて解体しても捜索を続けてほしいと願う。

震災後、見学者たちが記念写真を撮ったり、たばこをポイ捨てしたりするのを見て、いたたまれない気持ちになった。「校舎さえなければ」とも思った。

別の遺族の一人は、震災後１カ月以上子どもが見つからなかった。「何度も捜した場所で見つかったこともある。あの校舎がある限り、あきらめはつかない」

■予算申請に期限も

２月上旬、石巻市郊外の仮設住宅の集会所で、大川小があった同市釜谷の元の住民による総会が開かれた。

震災からの復興を目指し、大川地区の区長、有志らでつくる「復興協議会」が、釜谷の一帯を「鎮魂の森」とする計画案を説明。市と協議して作り、校舎について（1）解体する（2）一部を残す（3）主要部全体を保存する――の３案を示した。

協議会の説明は、遺族会、現在の同小児童の保護者に続いて3回目。３月８日に大川地区全体の住民説明会を開き、方向をまとめたい考えだ。

釜谷の住民だった只野さんは会場で言った。「集団移転も完了していない段階で、校舎の話をしてもいい答えは出ないと思う」。釜谷の世帯は仮設暮らしも多い。自身は保存を願うが、「決めるのはまだ早いのでは」。

被災校舎をどうするかは、当初から課題だった。震災翌年、協議会が開いた住民の話し合いでは意見が分かれた。「時間をかけて意見を出し合おう」と結論を先送りにした経緯がある。

一方、市には、早めに方向づけたい理由がある。予算の問題だ。

被災地の公園化には国の「復興交付金」をあてたい考えだが、今のところ補助対象となる集中復興期間は２０１５年度まで。新年度に調査費だけでもつけなければ、その後の申請は難し

いとみる。校舎保存には補修費も必要で、市単独の予算化は困難との考えだ。

■地域の協力が維持に不可欠

復興協議会の事務局長を務める濱畑幹夫さん（５６）は、海に近い自宅が流された。震災後、市役所を退職。トレーラーハウスでカフェを経営し、地域の絆の復活を図る。

大川小には今も多くの人が訪れる。校舎を含む一帯の「価値」に気づき始めた。「だれもが災害を学ぶ場所にできる。地元だけのものではなくなってきた」

保存を願う人たちが思い起こすのは、広島市の原爆ドームだ。保存決定には年月を要したが、大規模な保存工事には海外からも寄付金が集まった。

校舎を遺構として維持していくには、地域の協力が欠かせない。多くの子が亡くなり、過疎化が進むなか、地元だけでは責任が負えないとの声もある。「大川の『地域力』が今こそ問われてます」（川端俊一）

朝日新聞デジタルに掲載の記事・写真の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。
Copyright © The Asahi Shimbun Company. All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.